

音楽とことばの関連を図ったつくて表現する授業づくり

— 想いをことば・音・リズムにのせて —

山内幸枝¹

「ことば」には、様々な音楽性がある。「音楽」と「ことば」との関連を図ることによって、子どもたちの想いやことば、感じたことや考えたこと、音や音楽などに対する感性が相互につながり合い、多様なつくて表現する音楽が、より一層はぐくまれるに違いない。そこで、これらのことを意図的に音楽学習に位置付け、音楽表現する学習過程を設定するとともに、題材を開発し、検証した。

はじめに

子どもたちの身のまわりには音楽が満ち溢れている。しかし、音楽に対してはどちらかというと受け身の傾向が見られ、子ども自身の発想による表現、特に「音楽をつくて表現する活動」が少ないように思われる。その一方で、子どもたちは替え歌をつくったり、フレーズをアレンジしたりして、「ことば」や「メロディー・リズム」を日常の生活の中で楽しんでいっている。そうした子どもたちの即興的な表現を音楽表現に取り込み、音楽学習に位置付けていきたい。

このような授業展開の中で、子どもたちは一人ひとりがもっている表現の可能性に目覚め、自らの発想で音楽表現することの楽しさに気づいていくのではないかと考える。

研究の内容

1 音楽科の現状と課題

中央教育審議会義務教育特別部会（第33回・34回）議事録・配付資料〔資料2〕（文部科学省 2005）では、音楽教育の課題として、「楽曲を仕上げるのが目的になっている授業が見受けられる」「感性や表現力をはぐくむ鍵活動となる創作が、年間指導計画の中で十分に時数を割り当てられていない傾向が見受けられる」「創作に対して関心や意欲がやや低い傾向が見られるが、教師自身が苦手意識をもっていたり、十分な学習指導を行っていないためであると考えられる」「音楽の諸要素の働きや曲想の美しさなどを感じ取らせる指導の充実が必要」などのことをあげている。これらのことから、授業の内容が、歌唱や器楽の活動に偏る傾向があり、「音楽をつくて表現する活動」が十分でない状況が見受けられ、「音楽をつくて表現する活動」の充実が求められていることがわかる。

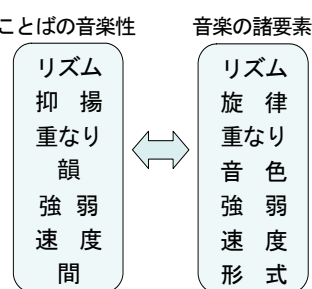
2 「音楽をつくて表現する活動」について

小学校学習指導要領解説音楽編（平成11年）では、音楽をつくて表現することについて、「あらゆる音楽活動の基盤となるものであり、全学年を通して連続的、発展的に学習を進めるようにすることが大切となる」（文部省1999）と述べている。しかし、「音楽をつくて表現する活動」について、高須（2004）は「取り組みにくい」「どのように指導すればよいかわからない」「そのため年間を通した音楽指導の中で、（中略）余り取り扱われていない状況も見受けられる」などと、教師の苦手意識や指導状況を指摘している。また、「音楽をつくる活動が、効果音、擬音づくり等に偏っており、改善する必要がある」（文部科学省 2005）と、指導の充実をあげている。

音楽をつくるためには、教師が一方向的に教え込むのではなく、子ども自身が音や音楽に直接かかわりながら、様々な音を探したり、体験したり、想像したり、組み合わせたりしながら、音のおもしろさに気づくとともに、音を音楽へと構成する音楽の要素や音楽のしくみのおもしろさに触れるような学習が必要となる。そして、「音楽をつくて表現する活動」を系統立てて、連続性をもって行うことが重要となる。

3 音楽とことばとの関連

子どもたちが日常使うことばには、リズム、抑揚、重なり、韻、強弱、速度、間などの音楽性がある。このことばの音楽性を膨らませていくと、音楽の諸要素に重なっていく。第1図はことばの音楽性と音楽の諸要素について表したものである。この図からわかるように、いくつもの点で関連し合っている。これらを相互関連させたり組み合わせたりしていけば、多様な「音楽をつくて表現する活動」が展開できるのではないかと考える。



第1図

ことばの音楽性と音楽の諸要素

1 藤沢市立六会小学校
研修分野（音楽）

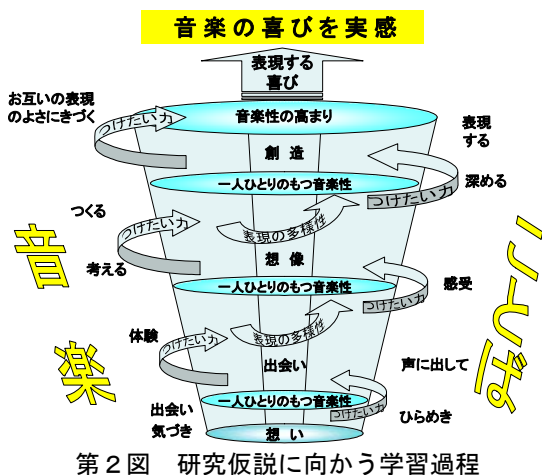
4 研究仮説

子どもたちの様々な「想い」が、ことばや音、リズムを伴いながら音楽となるような、「多様な音楽表現」が拓かれていくために、次のような仮説をたてた。

音楽とことばの相互関連を図る中で、「つきたい力」を明確にした、「音楽をつくって表現する活動」を意図的に指導していけば、多様な音楽表現が拓かれ、音楽の喜びを実感できる子どもをはぐくむことができるのではないだろうか。

音楽をつくる中で、一人ひとりの想いを、音楽やことばと相互にかかわらせていきたい。そのために、子どもたちが音やことばを聴いたり、探したりする音楽的な体験を大事にしたい。そこでは、思い浮かんだことばを声に出したり、操作したりして音や音楽を感じ取ることが重要となる。感じ取ったことをもとに、自分たちなりの想いをもって、考えながらつくり上げていく。そして、つくった音楽を自分で表現し、友だちの表現を聴き合うことで、お互いの表現のよさに気づいていくだろう。このような音楽活動が複合的かつ螺旋状に進展し、音楽がつくられていく。

第2図は、研究仮説に向かう学習過程を音楽とことばの両面から考えたものである。



第2図 研究仮説に向かう学習過程

図にもあるように、こうした出会いから、想像、そして創造へという活動の中で、「つきたい力」がはぐくまれるように意図的に働きかけることで、多様な音楽表現が拓かれ、一人ひとりのもつ音楽性が高まっていくのである。これらの活動が表現する喜びをはぐくみ、音楽の喜びの実感につながっていくと考えた。

5 題材について

上記の研究仮説を具現化するためには、子どもたちの表現のイメージが広がるような題材開発が必要となる。そこで、題材を子どもたちが慣れ親しんだ学校のいろいろなもの、「六会小の『あるもの』」に求めることにした。これは、『あるもの』になるという擬人化を通すことで、より多くのことばや音が生み出されるのではないかと考えたからである。生み出された音

素や単語、フレーズなどの様々なことばは、多様な形で音楽表現に生かしていくことができる。そのために、子ども自身が『あるもの』になって感じたり、考えたりして、見えてくるものや聞こえてきそうな音を探したり、想像したりして、イメージを膨らませる活動の工夫が重要となる。その上で、自由な発想の中で子どもたちが生み出した音やことばをもとにして、声や楽器を使って、音楽づくりを進めていきたいと考えた。

本題材では5～7人のグループで音楽づくりに取り組むが、音楽をつくる過程では、自分の発想を生かしながら友だちと協力することが必要となる。お互いの表現を聴き、知恵を出し合う学習の場となるように、音楽をつくる過程を大事にしたいと考えた。

6 検証授業

対象：第6学年 2クラス 74名

(1) 題材名

「六会小の『あるもの』になって音楽をつくろう」

(2) 題材目標

- ・音楽とことばのつながりや音楽の諸要素を感じながら、簡単なリズムやふしをつくって表現することができる。

- ・友だちとかわり合いながら、お互いの表現のよさに気づいて、よりよい音楽活動をめざしていくことができる。

(3) テーマとつきたい力のかかわり

子どもたちがより効果的に、自分の想いをことば・音・リズムにのせて、質的に高まった音や音楽表現にしていくためには、それに必要な音楽的な諸能力が身につけていなければならない。

小学校学習指導要領解説音楽編（平成11年）では、音楽的な諸能力について、「児童が感じたことや心に描いた思いを、自ら声や楽器で表現して伝えたり、演奏のよさや音楽の美しさを感じ取りながら、主体的に聴いたりすることができる能力」と説明している。

本テーマや研究仮説の達成のためには、音楽的な諸能力が段階的に高まりながら、学習展開がなされなければならない。そのためには、「つきたい力（身につけさせたい音楽的な諸能力）」を「音楽の諸要素」と「ことばの音楽性」に相互に関連させた段階的な音楽学習の展開が必要になると考えた。

第1表は、これらのことを図表化したものである。音楽をつくって表現するためには音の属性（音色、高さ、長さ、強弱）やことばの音楽性、音楽の表情をつける諸要素などを感受したり操作したりする能力が必要となる。そして、それらを基盤としてつくった表現を工夫したり、音楽の構造やしぐみに着目したりして、音楽を一貫性のあるものにしていく能力が必要となる。さらに、つくった音楽を友だちとともに演奏する技能を身につけさせたいと考えた。

第1表 指導の段階表

つきたい力(身につけさせたい音楽的な諸能力)	主な音楽の要素	音楽とことばの関連
①音の属性やことばの音楽性に気づく能力	旋律、リズム、重なり	高さ、長さ、リズム、抑揚、重なり
②音やことばの操作能力 (探す、選ぶ、組み合わせる)	旋律、リズム、重なり	高さ、長さ、リズム、抑揚、重なり
③音楽の表情をつける諸要素に着目する能力	強弱、速度、音色	強弱、速度、音色
④音楽の表情をつける諸要素を操作する能力	強弱、速度、音色	強弱、速度、音色
⑤音楽の構造に着目し、音楽を一貫性のあるものにする能力	旋律、リズム、重なり、強弱、速度、音色、形式	形式、フレーズ、繰り返し、旋律、リズム、重なり、音色
⑥友だちとともに演奏する技能 (拍にのる、他者の音を聴く、声を合わせる等)		

(4) 題材の指導計画

題材の指導計画に、「ねらい」と「つきたい力」を明確に位置付け、以下のような題材の指導計画をたてた(第2表)。

第2表 題材の指導計画

時	ねらい	つきたい力
1・2	○鑑賞曲「運動場のヒマラヤスギ」を聴き、これからつくる音楽の全体像をつかむ。	①
	○グループの場面づくり。	②
	○つくりだす音楽のイメージを決め、音やことばを探したり、想像したりする。	
3	○鑑賞曲「時計は眠りたい」を聴き、声の表現の多様性、音楽の諸要素に着目する。	②
	○ことばの音楽性を高める・広げる(重なり・響き)。	③
	○「あるもの」をオノマトペで表現する。	
4	○ことばの音楽性を高める・広げる(リズム・抑揚)。	②
	○グループで、ことばに合う旋律をつくる。	③
5	○鑑賞曲「雨のドローン」を聴き、音楽をつくっている構造に着目する。	③
	○ことばの響きや、場面の雰囲気合う楽器を使い、イメージに合った音楽をつくりだす。	④
6	○声や楽器を使って、音を重ねたりしながら場面に合う表現を工夫する。	④
	○音の響きや組み合わせ、形式を工夫して表現する。	⑤
7	○クラス全体の曲を発表し、つくり上げた喜びを味わう(録画)。	⑥
	○録画したビデオを見て、自分や友だちのつくった作品を振り返る。	

7 検証授業の結果と考察

(1) 意図的な働きかけからの考察

授業の中でいくつかの意図的な働きかけを設定した。主に行った意図的な働きかけを□で囲い、それについての考察をした。

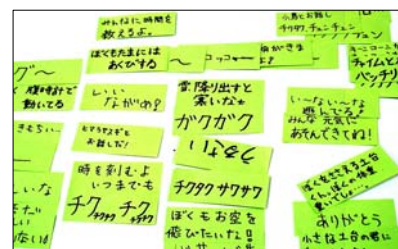
【第1・2時】

作曲の鑑賞を通して

始めに教師自身の作曲を鑑賞させた。これは子どもたちの「どうやってつくるのかわからない」「難しそう」「アイデアがわからない」という学習への抵抗感を取り除くためである。その後、「まず『ぼくはヒマラヤスギ』ということばが浮かんで、口ずさんでみると、こんなリズムやメロディーになったんだよ」と、音楽ができるまでの具体的な過程を示した。そのことによって、「これならできそう、つくってみたい」と、子どもたちに学習意欲や見通しをもたせることができた。

音やことばを探し、想像するために

実際に『あるもの』を見たり、触ったり、周りの音を聴いたりして、体で感じることを通して、子どもたちの中によりイメージが広がると考えた。子どもたちはその場所に行き、音やことばを探したり、想像したりした。集めた音やことばを付箋に書き、それらの中からオノマトペ(擬音語・擬態語)を選んで組み合わせたり、『あるもの』の気持ちになってことばをつくったりした。付箋に書くことで、断片的なことばでも抵抗なく書き出すことができ、並べ替えながらことばを整理することができた(第3図)。子どもたちのワークシートには、「少し外



第3図 付箋に集めたことば

に出るだけで、いろいろな音やことばが想像できた」「実際に聞こえない音も聞こえてくるような感じがした」とあった。これらの付箋から、身近な生活の中にある音に耳を傾けたり、想像したりすることで、『あるもの』へのイメージを広げていったことがわかる。

【第3時】

声の表現の多様性に気づかせるために

声の重なりや響きといった声の表現の多様性に気づかせるために、フライシャー作曲「時計は眠りたい」を鑑賞させた。子どもたちは、音楽を特徴付けている様々な要素に着目し、曲想とのかかわりを感じ取っていた。その後全体で、声の高さ、長さ、強さを変えて「声のリレー」をし、発声しながら声の重なりや響きのおもしろさを感じ取らせる活動をした。子ども自身が声という素材を聴いたり、親しんだりした活動により、声の表現の多様性を実感することができ、自分たちの表現に生かす上で有効であった。

オノマトペの表現をつくることを通して

前時に集めた「付箋のことば」の中からオノマトペだけを使い、『あるもの』を表現させた。子どもたちは、「どうやって重ねたらきれいになるかを考えた」「リズムや強弱をつけたりして、いろんな音ができた」などと、声の響きや強弱、速度を試行錯誤しながら表現に生かしていた。オノマトペだけでもおもしろい音楽になることに気づき、楽しんで取り組む姿が見られた。

以上のことから第3時の意図的な活動は、自分たちのつくる音楽の手がかりとなっていたと考えられる。

【第4時】

ことばのリズムや抑揚を生かして

第4時の始めに、ことばのリズムや抑揚を生かしながら、ことばに合う旋律をつくる手だてを示した。全体で「♪♪♪♪」のリズムに合わせて、グループで考えたことばを使い、「ことばのリズムリレー」をした。その後、第2時までに出し合ったことばをもとにして、詩をつくらせた(第4図)。

子どもたちは、「ことばのリズムリレー」をヒントにして、自分たちのつくった詩を何度も声に出して、ことばのリズムや抑揚を感じていった。



第4図 ことばを選び、詩をつくる様子

さらに、音の高低や長さを図形楽譜に表して、電子オルガンや鍵盤ハーモニカを使って、音をとりながら音階で表した。フレーズが生まれ、だんだん音楽になってくると、音楽をつくっているという楽しさを、子どもたちが実感していることがわかった。

子どもたちのワークシートに「まず言葉ができ、リズムができ、歌ができた」「音とことばの間を考えて、合わせられるようにし、音の高さを調節した」「曲をつくるのがそんなに難しくないことがわかった」とあるように、ことばのリズムや抑揚を意識させていくことで、リズムや旋律づくりがスムーズにでき、子どもたちに音楽をつくっているという手応えをもたせることができた。

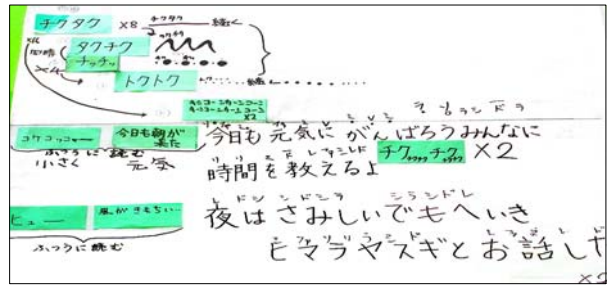
歌ができると、「風がふいている様子をすずを使って表したい」と子どもの中に音や音楽のイメージが自然と広がっていき、次時の学習に結びついていった。

図形楽譜を用いることを通して

子どもたちがつくった音楽を記録、再現するためには、楽譜が必要となる。表したい内容や気持ちを自由に書き加えられるように、図形楽譜を用いた。

第5図は第4時まで描いた図形楽譜である。ことばのもつ抑揚を図形楽譜に表すことで、子どもたちに音の高さを目で実感させることができた。また、五線譜を書くことが苦手な子でも抵抗無く描き表すことができた。さらに、図形楽譜を用いることは、グループ

の中でお互いの音楽を共有し、自分たちの音楽をつくり上げていく上で有効であった。



第5図 図形楽譜

表現し合うことを通して

第3・4時の授業の終わりに、全体でできたところまでを発表させた。前時につくったオノマトペの表現につなげて歌を歌い、声を使った表現を発表させた。音楽のイメージに合う振り付けをしているグループもあり、より「表現したいもの」の気持ちになりきって表現しようとしていた。

自分たちの音楽をみんなに聴いてもらうということが刺激になり、グループ内の集中力や結束力も高まった。また、他のグループが工夫しているところを自分たちのつくる音楽のヒントにするなど、お互いのよさを認め合うことができた。

【第5時】

「雨のドローン」の鑑賞を通して

音楽の構造に着目させるために、「雨のドローン」を鑑賞させた。ここでは、どんな雨が降っているかに着目させて聴かせた。子どもたちは「雨がぼつぼつ降る感じがした」「ザンザン降っていた」など、自分が描いた様々なイメージを発表した。ここでさらに、教師が「音楽のどの部分からそのイメージを感じられたかな?」と、音楽を特徴付けている要素を問いかけることで、子どもたちから「音が弱くなっていった時、雨がだんだん弱くなる感じがした」と、雨のイメージを引き出すことができた。鑑賞曲を通して、音のイメージを多様に広げている様子がわかった。

木琴を使った即興表現を通して

鑑賞曲を参考にし、木琴を使って、ドローン(持続的な低音)にパターンや旋律を重ねる即興表現の例示をした。雨のイメージを膨らませていく中で、音楽的な重なりや響きが生まれ、音楽ができるしくみに気づかせた。何人かの子どもに全体の前で即興表現を体験させ、音の強弱、速度、タイミングなど、他の人の音の特徴を聴きながらそれに合わせて音を出すことを意識させた。単音の繰り返しでも、別の音を重ねたり、様々な音の出し方を工夫したりするだけで、一つの音楽が生まれることを実感させることができた。この活動は、音楽の構造に着目しながら、場面の様子に合わせて音の強弱を考えたり、音を加えたりして、表現を広げていくために有効であった。

イメージに合う楽器選びを通して

グループでことばの響きや場面の雰囲気合う音楽になるような楽器選びをした。子どもたちの楽器への興味関心はとても高く、音の出し方や重ね方を様々に工夫していた（第6図）。



第6図 グループ活動の様子

「時計の チッチッチの所をどう音の出し方にするか考え、トライアングルをつかみながら短い音を出すことにした。短い方が歌によく合う」

「演奏のバランスを考えて楽器を決めた」など、音楽を特徴付けている要素に着目しながら取り組むことができた。楽器を使うときに、効果音、擬音づくりに偏らないように、実際の音からイメージを膨らませて音楽をつくるように助言した。

これまでの活動で、『あるもの』への想いを十分に深めてこられたので、「こんな音を使いたい」「はね返る所にシンバルを3回入れて・・・」「歌の後に、木琴と鉄琴でメロディーを演奏しよう」と、子どもたちの想いは膨らみ、楽器を使う活動もスムーズにできた。楽器を使うことで、表現したい音のイメージが広がり、思考・判断しながら、様々な音素材を使い、それら进行操作し、音楽へと発展させていったことがわかる。

【第6時】

音楽に表情をつけるために

第6時は、音楽的な表情をつけることや全体のバランスを考えて表現することなどを意識させた。子どもたちは、「カウベルのたたく棒をかえて変化をつけてみよう」と、曲が完成に近づくに従い、「こんな風に表現したい」という想いを高めていった。楽器の旋律の上に抑揚をつけた詩のことばを重ねるグループもあり、自由な発想で音楽づくりをすることができた。

グループ指導では、それぞれつくった音楽のよさが表現できるように、息を合わせて練習することを意識させた。曲が完成すると、「思ったより楽器が合っていて、リズムもよく、すごくいい演奏ができそう。曲が完成してうれしい」と、音楽をつくり上げる喜びを実感することができた。自分たちの手で、音やことばを積み上げて音楽を完成させたことは、子どもたちに大きな自信と確かな手応えをもたせた。

【第7時】

つくった音楽の発表会を通して

発表時、各グループの『あるもの』をスクリーンに映しながら演奏をし、演奏者と聴いている人たちがそのイメージをもって空間を共有できる雰囲気づくりをした。グループで工夫したところや音楽の特徴を発表させ、聴いてもらう人に自分たちの想いを伝えてから演奏させた。発表の後ビデオを見て、自分たちの演奏やこれまでの音楽づくりを振り返らせた。

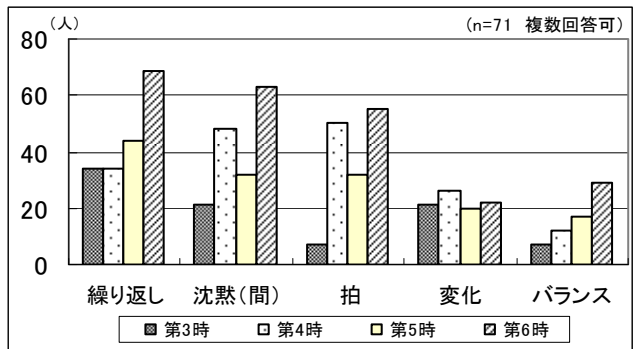
授業後の感想では、「的当て板の気持ちになって、楽しくみんなに思いが伝わるように歌えた」など、表現する喜びを実感できた。また、他のグループの発表を見て、「声の重なりがあったり、振り付けがあったりしてよかった」「声がしっかり出ている。声を出すだけで音楽がグッとよくなる気がする。まさに名演奏」などと、友だちの表現のよさに気づくことができた。発表会を通して、つくった音楽を交流し合うことでお互いに認め合い、学びの達成感を味わうことができた。

(2) 題材を通しての考察

ア 音を音楽へと発展させていくために

題材を通して、子どもたちは、主にどのような「ことばの音楽性」や「音楽の諸要素」を取り入れて、音を音楽へと発展させていったのであろうか。

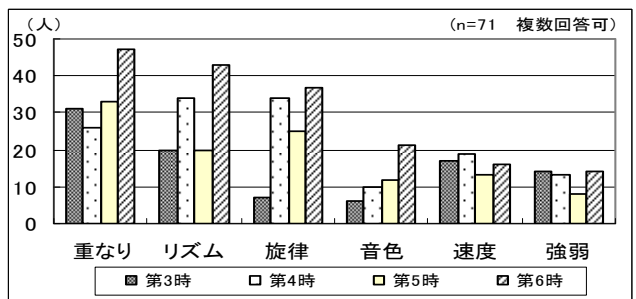
各授業時間に使用したワークシートから子どもたちの意識を探ると、多くのグループで、「繰り返し」「沈黙(間)」「拍」を取り入れて、つくって表現していることがわかった（第7図）。



第7図 音楽づくりに取り入れた表現の工夫

特に「繰り返し」については、ほぼ全員が音楽づくりに取り入れていた。これは、「繰り返し」が、音楽をつくっていく上で有効であることに気づき、音楽をつくるしくみに目を向けることができたからである。音やことば、フレーズを繰り返すことにより、『あるもの』へのイメージを深めていったととらえることができる。

第8図は音楽づくりに取り入れた音楽の諸要素をワークシートから読み取ったものである。



第8図 音楽づくりに取り入れた音楽の諸要素

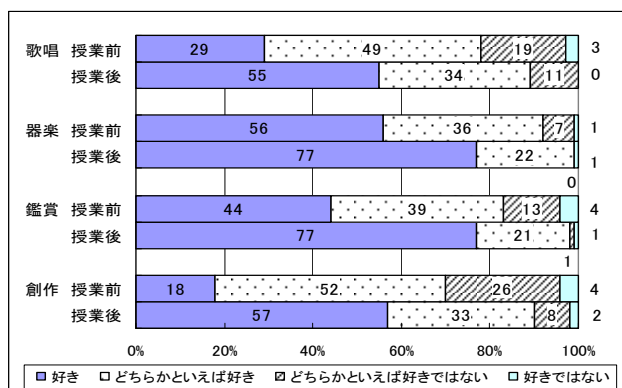
これを見ると、主に「重なり」「リズム」「旋律」などの要素を多く取り入れている。特に「重なり」に着目している様子がわかる。このことは、子どもたちが

声や楽器でつくったリズムや旋律が、きれいに響き合うように、組み合わせを考え、音と音がうまく重なるように何度も工夫したり、知恵を働かせたりしていったためだと考えられる。

以上の二つのグラフから、子どもたちは音から音素材、フレーズから音楽へと質的に高めていく過程で様々な音楽の諸要素を感受し、操作しながらつくって表現していったととらえることができる。

イ 音楽をつくって表現する活動への意識

子どもたちの授業前と授業後の音楽活動に対する意識の変化を調べてみた（第9図）。



第9図 子どもたちの音楽活動に対する意識の変化

グラフからもわかるように、検証授業後には、どの内容に対しても「好き」「どちらかといえば好き」と答えた子どもの割合が増加した。さらに、子どもたちの、「声量に気をつけながら歌うようになった」「音の出し方に気をつけるようになった」「音を注意深く聴くようになった」という声からも、「音楽をつくって表現する活動」が歌唱、器楽、鑑賞の音楽活動全体にまで興味関心を広げ、音楽学習の意識を高めていったといえる。

学習を終えた感想に「作曲家になった気分で皆と楽しく音楽ができた」「自分が作った詩に自分でメロディーをつけ、全部オリジナルな所がよかった」「音楽の真のすばらしさを感じられた」とあるように、子どもたちは、自分たちの手で音楽をつくり上げたことに大きな自信をもち、音楽の喜びを実感することができた。

8 研究のまとめと成果

「音楽」と「ことば」を様々な形で関連させた指導の結果、子どもたちは自分たちの想いをことば・音・リズムにのせ、感性を広げ、深めながら多様な音楽表現を生み出していった。これは、音楽をつくっていくそれぞれの段階で、つきたい力を明確にした、意図的な働きかけが有効であったからだと考える。子どもたちは音を音楽へと構成する音楽の諸要素や音楽のしくみのおもしろさに触れながら、それらを自分たちのつくる音楽に取り入れていった。だからこそ、子どもたちはお互いのグループの演奏を聴き合い、それぞれの

よさを認め合いながら、自分たちの音楽をさらによりものへと高めていくことができたのである。これらの子どもの変容は、意図的な働きかけを通じた指導の積み重ねであるといえる。

子どもたちの音楽作品を見ると、ことばを使ってつくった音楽には多種多様な表現の工夫があった。声の重なり、リズム、響きを生かしたオノマトペ、ことばのリズムや抑揚を生かした歌、楽器の旋律の上に抑揚をつけてのせたことば、表現したいイメージをさらに広げていくための楽器、ことばや音楽のイメージに触発された全身を使った表現など、様々な表現の工夫がちりばめられていた。これらの作品から、子どもたちはことばと音楽の諸要素を統合的に活用して使い、自分の想いをことば・音・リズムにのせて音楽表現していったことがわかる。

おわりに

「音楽をつくって表現する活動」は、子どもたちにとって魅力的なものである。しかし、教師が音楽づくりの授業を展開するとなると、教材研究やそれをもとにした指導の手だての具体化などに多くの時間がかかり、なかなか授業実践に結びついていかない。

このような課題を解決していくためには、低学年から様々な音楽活動の中で、子どもたちの状況や発達段階に合わせて、意図的な音楽づくりの指導をしていく必要がある。本研究が、そうした音楽づくりの一里塚となれば幸いである。

引用文献

- 文部省 1999 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社 p.11
- 文部科学省 2005 中央教育審議会義務教育特別部会（第33回・34回）議事録・配付資料〔資料2〕（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo6/gijiroku/001/05090901/002.htm 2007.5.15取得）
- 高須一 2004 『音楽をつくって表現できるようにする』 活動を中心に（『初等教育資料』平成16年11月号）東洋館出版社 p.48

参考文献

- 島崎篤子 1993 『音楽づくりで楽しもう！』 日本書籍
- 高須一 1996 『創造的音楽学習』の展開と意義（『シリーズ音楽と教育1 音楽科は何をめざしてきたか？』） 音楽之友社
- 坪能由紀子 1995 『音楽づくりのアイデア』 音楽之友社
- 中地雅之 2003 「〈ことば〉と〈音楽〉による即興表現の教育的可能性」 音楽教育学第33-2号